（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　井上正子

井上正子氏の博士論文 *The Harlem Renaissance and the Circum-Caribbean World*（ハーレム・ルネサンスと環カリブ世界）は、1920 年代、主にニューヨークのハーレム地区を中心として勃興した黒人の文芸・文化復興運動ハーレム・ルネサンスの作家の活動を、カリブ海文化の文脈に据えて読み直す作業である。取り上げる作家はゾラ・ニール・ハーストン、ジーン・トゥーマー、エリック・ウォルランド、ジェシー・フォーセット、ネラ・ラーセン、クロード・マッケイの 6 人。先行するテクストとの関係や互いの比較、ハーレム文化のカリブ海文化論への再文脈化などを通じて彼らの合計 9 つの作品（集）を読み直している。

エドゥアール・グリッサンやアントニオ・ベニテス=ロホら、より最近の非英語圏のカリブ海文化論をも参照しながら、アメリカ文学史上のできごととしてのハーレム・ルネサンスを環カリブ海文化や世界文学の理論枠へと拡大して解釈する井上氏の論文の意図は、近年のアメリカ文学研究の潮流を受けてのものである。そうした動向を把握していることは、井上氏の研究の今日性を示してもいるだろう。

環カリブ海文学としてのハーレム・ルネサンスという視座を得ることにより、上記の作家・作品についての解釈を刷新したことは、とりわけ文学研究の博士論文として高く評価されるべき点である。ウィリアム・シーブルックの『魔法の島』の書き直しと過小評価されるハーストンの『わが馬よ語れ』が、単なる書き直しでなくカリブ的要素を取り込んだハイブリッドな語りであることを証すなど、先行研究への批判から自説を展開している。

しかしながら、その企図の壮大さゆえに、反面、基本的な局面での瑕疵を免れていないのも事実であろう。個々の作家（とりわけ、もっとも重要であるはずのゾラ・ニール・ハーストン）についての研究と呼ぶには一次資料の博捜を欠き、物足りない。批評のタームに頼りすぎて個々のテクストの分析が弱い箇所もある。前提にあるはずのパンアフリカニズムや同時代のモダニズム文学（フォークナーなど）、アフロクバニスモ（キューバ）、ネグリチュード（仏領アンティール）との関係への目配りがもう少し欲しいところである。

審査では以上のような問題点について審査員から指摘があり、それに対して井上氏は、論文執筆の過程を振り返りながら誠実に受け答えした。

ともあれ、上のような問題が生じるのも、ひとえに 6 人もの作家を取り上げて総体的に論じようとする井上氏の本論にかける意欲によるものであり、これだけの人数を取り上げて総体的に論じたことの意義は、そうした問題をカバーするに十分であり、その学術的成果は評価すべきである。ゆえに本委員会は本論文が博士（文学）の称号に値するとの見解で一致を見た。